ふるさとの誇り ③

御所五郎丸と虎御前

～市内に広がる日本三大仇討ちの一つ 曽我物語の世界～

日本三大仇討ちの一つで、歌舞伎や能楽の演目にもなっている「曽我物語」。この曽我物語の中に南アルプス市と深いかかわりがある二人の人物が、重要な脇役として登場します。曽我物語と南アルプス市の関係を探ってみましょう。

曽我物語とは…

平安時代の末期、伊豆の武士たちのあいだでは、複雑な領地争いが繰り広げられていました。工藤祐経も従兄に当たる伊東祐親に領地を奪われた一人でした。祐経はその報復を企て、家来に伊東祐親を襲わせ、祐親の子河津祐泰を殺害します。

未亡人となった祐泰の妻は、2人の子どもを連れて、相模の曽我祐信のもとに嫁ぎます。父を失ったとき、兄十郎は5歳、弟五郎は3歳でした。

諏訪神社の十郎と虎御前木像（芦安）

さまざまな苦難を経た末、兄弟に父の仇を討つチャンスがめぐってきました。建久4年（1193）、源頼朝の富士の巻き狩りの折、曽我兄弟は父親の敵工藤祐経を討ち果たし、18年にも及ぶ本懐を遂げます。兄十郎は討ち死にしますが、弟五郎は頼朝にことの次第を報告しようと、敵陣の中を突き進みます。このとき五郎に向かっていった武士たちは、ことごとく倒されますが、女装して近づいた御所五郎丸によって捕らわれます。翌日五郎の尋問が行われ、祐経の遺児に請われた頼朝は断首を言い渡しました。この仇討ちを書いたものが曽我物語です。なお、五郎の尋問には幕府の重臣であり、櫛形地区小笠原に館をかまえた小笠原長清も参列していました。

十郎と虎御前

十郎には、大磯の長者の娘で街道一の美女といわれた虎御前という恋人がいました。虎御前は芦安安通生まれとも言われ、幼いころから美人と評判でした。縁あって、伊豆大磯にある料亭の養女となり、曽我十郎と恋仲になったのです。

大磯で十郎の訃報を聞き、その悲しさのあまり髪を落として尼となり、兄弟の菩提をともらいました。遺骨を納めるため信濃善光寺に向かう途中、安通村へ立ち寄ります。村人からお薬師様を改装した住居を差し出され、親切に感謝しながら追善供養を続けていたといわれています。社の近くには、虎御前が鏡を立てて化粧をしたという大きな石があり、村人はいつしか「虎御前の鏡立石」と呼ぶようになりました。芦安の諏訪神社には、十郎と虎御前を彫刻したと伝えられる木像が納められています。

虎御前の鏡立石（芦安）

五郎と御所五郎丸

曽我五郎から頼朝を守った五郎丸。功をあげたにもかかわらず、女装して油断させた行為が武士道に反するとして鎌倉を追放され、野牛島の地に流されたと伝えられています。

現在集落の中心に建つ観音堂には、五郎丸の肌守りと言われる地蔵菩薩の木像が祀られ、お堂の傍らには五郎丸の墓が建てられています。毎年7月23日、野牛島地区の人たちによって五郎丸を供養するお祭りが開かれています。

御所五郎丸の墓（野牛島）

芦安地区「虎御前」と八田地区「御所五郎丸」の二つの伝説が、曽我兄弟をめぐってつながりました。また物語には甲斐源氏小笠原長清も登場します。南アルプス市を舞台にした、もうひとつの「曽我物語」。伝説の地を歩いてみませんか。